



Title	鼻を切りおとしたゾウ : 続・養豚連環画を読む
Author(s)	武田, 雅哉
Citation	連環画研究, 10, 128-147
Issue Date	2021-09-30
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98499
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98499
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_10_128-147.pdf



鼻を切りおとしたゾウ—— 続・養豚連環画を読む

武田 雅哉

養豚テーマの連環画として、今回は、小説「韓梅梅」（1954）を連環画化した作品群を中心に読んでみた^{〔註1〕}。今回は、50年代末期の大躍進時代から文革期につづく連環画を見ていきたい。

前回も触れたが、1958年、大躍進と人民公社化の運動が始まると、政府は「猪多糧多、糧多猪多」のスローガンを発し、毛沢東による「養豚業の発展に関する書簡」（1959年10月31日）は、畜産における養豚の地位向上を訴えるものであった。これを承ける形で、「養豚業は大きな発展をさせなければならない——豚は六畜のトップなり」（1959年12月）、「養豚業は堆肥を増やすのに注意しなければならない」（1960年9月）などの論説が『人民日報』に掲載されるや、この運動を図像によって宣伝しようとする動きも活発化する。まずは50年代後半期くらいからの『連環画報』に、それらを見てみよう。

大きな豚はいいことだ

梁津による「喂好！喂壞！」（「よい餌！わるい餌！」『連環画報』1956年第17号）は、好ましい養豚と悪い養豚の対比を図示したものである〔図1〕。豚小屋の衛生環境や餌に

留意した養豚は、たとえ餌代を節約しても肥え太った豚に育ったが、それらに消極的な旧式の養豚法では、餌代に金をかけても、ガラガラに痩せた豚になってしまうというのだ。後ほど触れる、「富養猪」と「窮養猪」の対立である。理想的な養豚人が「姑

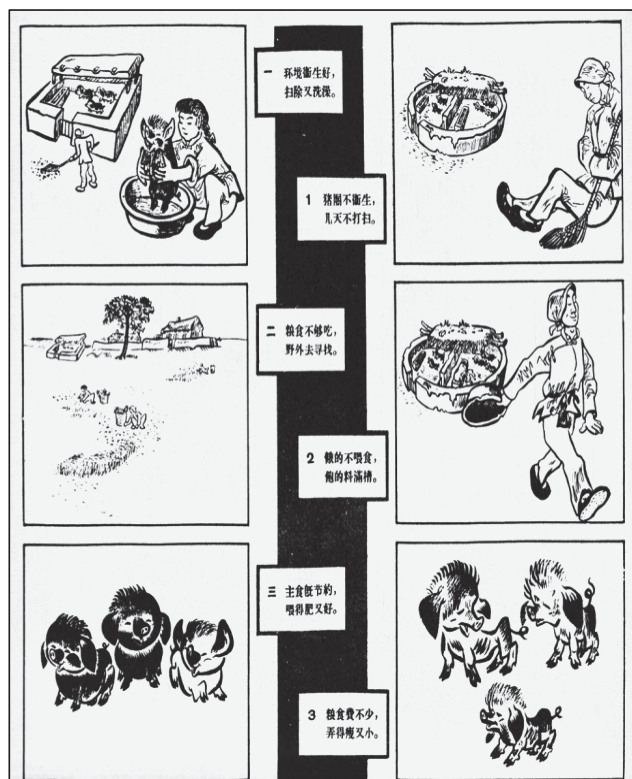


図1 「喂好！喂壞！」（1956）

娘」で、そうでない養豚人が男性であることは、韓梅梅をも想起させるが、「よい・わるい」の対立が性別によって代弁される際に常用される区分である。

王楽天の「大力養猪」（「養豚を頑張ろう」『連環画報』1956年第20号）は、漫画表現による、わかりやすい宣伝画である〔図2〕。1957年から62年までに、豚を1億3800万匹から2億5000万匹に増やそうという、近未来の大躍進プロジェクトが、母豚によって子豚たちに提示されている。

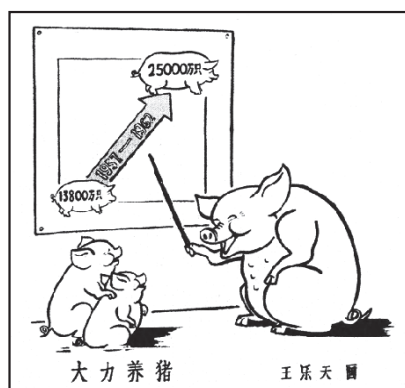


図2 「大力養猪」



図3 「大力發展養猪事業」

汪志傑による「大力發展養猪事業」（「頑張って養豚事業を發展させよう」『連環画報』1957年第2号）と題された連作の一枚には、「このバークシャー種の雄豚は、人の姿を目にするなり、立ち上がって親しげに呼びかける」とのキャプションがある。心なしか笑っているように見える豚の表情も、「人の姿」を表現している影とともに、ちょっと怖い感じもする〔図3〕。

これは、北京にある中ソ友好農業生産合作社の養豚場を訪問した際に描かれた絵ということだ。豚が笑っているように描かれるのも、それが善にして益となる獣だからだろう（でも、やっぱり怖いのが……）。

「看農業展覽」（「農業展覽を見る」『連環画報』1956年第6号）でも、いささか漫画風に、満面に笑みをたたえた巨大な豚が描かれている〔図4〕。上から吊るされた看板には、「新金猪 年齢2歳 体重222キロ」とある。これは標準以上に肥えているということなのであろうが、この種の記録は、今後、どんどん更新されていくことになる。当時の『連環画報』は、しばしば大きな頁や表紙を使って、近未来のあるべき中国の風景を描いた。游尤常の「為第一個五年計画的偉大成就歡呼吧！」（「第一次五カ年計画の偉大な成就のために歓呼しよ



図4 「看農業展覽」

う！」『連環画報』1957年第18号)は、農業、漁業、工業、軍事などの発展を描きこみ、外国人の記者も取材に来ている様子を描いたものだが、画面の一部には「一個社兩万頭猪」とのスローガンとともに、やはり笑顔を湛えた、まるまると太った豚たちが描きこまれている〔図5〕。

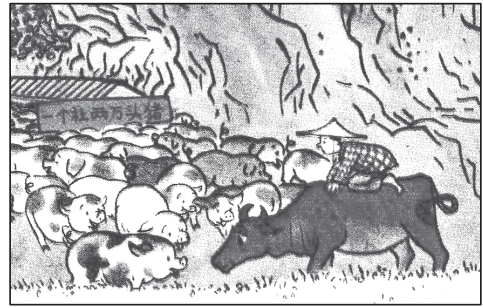


図5 「為第一個五年計画……」

「富養猪」と「窮養猪」

次に単行本として刊行された連環画を見てみよう。当時、養豚について問題になっていたのは「富養猪」という考えであった。金をかけなければ、養豚はできないから、貧農には養豚業は無理であるという考えである。このテーマを扱っているのが『窮養猪』（中共泰興県委員会宣伝部/編、労羊/絵図、江蘇文藝出版社、1958年6月）である。

江蘇省の泰興県では、むかしから、金をかけなければ養豚はできないという「富養猪」思想がはびこり、貧農下層中農が養豚に挑戦することをさまたげていた。樊楊農業社では、社長の王風雛や養豚の能手である何啓明らによって、低予算でも養豚に従事できる「窮養猪」の方法が研究され、ついにこれに成功したのであった。めでたし、めでたし！連環画は、「富養猪」と「窮養猪」を比較し、前者の失敗をあげつらいながら、後者の勝利を謳歌している〔図6〕。中に、「富養猪」で育てた豚が、採算の合わない結果に終わったことを知ったお婆あちゃんが、「アイヤ！三頭の豚が、あたしの棺桶ひとつ分を喰っちゃったよ！」と、棺桶に換算して嘆く場面がある〔図7〕。「富養猪」が、旧来の習慣と並走するものと描写されているのもおもしろい。

養豚運動は、いきおい子供たちにも波及する。児童画冊の『小猪養大了』（『小豚が大きくなった』。邴漢桂/写、潘晋華/絵図、少年兒童出版社 1959年5月）を見てみよう。呂叙春ら、石門公社の四人の少年先鋒



図6 『窮養猪』第21コマ

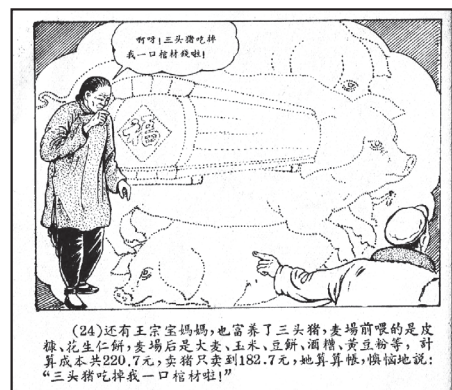


図7 『窮養猪』第24コマ

隊員は、自分たちで豚小屋を造って養豚をする計画を立てた。生産隊長に申請して土地を借り、豚小屋を造り、支給された一匹の子豚を懸命に育てる。小屋は清潔を保ち、餌にも気を配る。豚が病気にかかり、痩せてくることもあったが、映画代をまわして薬を買い、病気を治した。豚はどんどん大きくなり、秋にはパンパンになった。表紙の絵がすべてを物語っているよう〔図8〕。



図8 『小猪养大了』

ソ連さんも巻き込んで

韓梅梅があこがれた養豚技術は、ソ連のそれであったことを想起していただきたい。ここに、大躍進時代の中ソ友好テーマをからめた養豚連環画を紹介しよう。いま、『失踪的猪』（『失踪した豚』。谷峪・鍾毅/改編、曹光/絵図、遼寧画報社、1959年5月）および『母猪回社』（『母猪が社に帰った』。浙江美术学院国画系三年級/画、上海人民美術出版社、1959年6月）という、いずれも1959年に刊行された連環画がある。これらは同じ原作に基づく連環画であり、原作は、浩然（1932～2008）の「母猪作客」（1957）である^{〔注2〕}。

中学を卒業した杜九江は、養豚の仕事を任されていたが、うっかりして豚小屋の鍵をかけ忘れ、孕んでいた一匹の雌豚を失踪させてしまう。まわりからは杜撰な管理を批判され、杜はしょんぼりとなる。三日後、その豚は、近くの鉦山のソ連専門家の宿舎で発見された。杜は、豚を引き取るべく、すぐすぐ鉦山に向かう。

豚を見つけてくれたのは、ソ連の専門家ルロノフ（蘆洛諾夫）であった。彼が帰宅すると、庭と家のなか荒らされていて、ふと見ると、大きな雌豚がいたのである。一緒に中国に来ていた彼の母親は、豚を見るなり、出産が近いことを知り、息子に、枝を集めて出産のための囲いを作るように命じ、やがて豚は十二匹の子豚を生んだ。かれの母は、二十年前は、優秀な「養猪姑娘」だったのである。

さらに杜九江は、専門家から、その中国農業に対する情熱を語られ、感動して、これまでの自分の考えを反省する。ソ連専門家の母からは、韓梅梅の遠い淵源が連想される。杜九江は、母豚と十二匹の子豚だけでなく、大きな土産を抱えて、わらしべ長者のごとく、みずからの公社に帰るのであった〔図9〕。



図9 『母猪回社』第37コマ

悪玉参上

『春桃』（胡逸/改編、李明強/絵画、上海人民美術出版社、1959年11月）は、同年の『長江文芸』3月号に掲載された魏子良の作品を原作としているという。

農民宣伝員の魏子良同志は、党の指示のもと、400キロの試験豚を育てる決意をする。大躍進政策に反対している游計安——人呼んで〈臭虫〉は、そんなものは不可能だと言って、なにかと妨害を企てる。〈臭虫〉とは南京虫、トコジラミのことだ。

夫のことが信じられなかった妻も、協力を誓い、かくして魏夫妻は、豚を「春桃」と命名して育てることになった。春桃は見る見る大きくなっていく。ある時、春桃が病気になったと聞いて駆けつけたが、あやうく〈臭虫〉の手で屠殺されるところだった。春桃の病気は、獣医のおかげで回復する。調査の結果、〈臭虫〉とその妻〈狐狸精〉が、毒をもって春桃を病気にし、屠殺処分に導こうとしたことが判明する。動かぬ証拠を突き出された二人は、犯罪行為を自白して、反省する。病気が治った春桃はますます大きくなり、ついに400キロにまでなる。こうして春桃は展覧会に出品されることになった。

豚の体重は500キロを超え、1トン近くになる場合もある。張家口で600キロを超える豚が確認され、飼育主は「屠殺免除許可」をもらって愛玩しているという（『中国網日本語版』2015年11月3日）。この作品には、〈臭虫〉や〈狐狸精〉といった、破壊分子という「敵」が描かれていることも指摘しておきたい。魏子良が「あいつらが怪しい……」^{づら}と思ひ浮かべる夫婦は、見事な悪役面に描かれている〔図10〕。

さてこの、大きければよいという豚をめぐる価値観には、大躍進時代の科学幻想を象徴するモチーフのひとつである「巨大生物」が拍車をかけることになる。ふたたび

『連環画報』のイラストにもどるが、全国農業展覧会を描いた游尤常の絵（「春節逛“館”（全国農業展覽館）“取經”回鄉」。『連環画報』1960年第2号）には、展覧館における展示物のひとつに、「新金猪 115キロ」とあり、巨大な豚とともに巨大な鶏やアヒルも展示されている〔図11〕。このころの『連環画報』には、同じ「巨大生物」テーマの絵画が頻繁に掲載されている^{〔注3〕}。



図10 『春桃』第95コマ



図11 「春節逛“館”（全国農業展覽館）“取經”回鄉」

田漢の原作による映画『十三陵水庫暢想曲』（1958）は、十三陵ダムの建設を描いた現代劇でありながら、1970年代という未来におけるダム周辺の様相にも言及したもののだが、巨大な果物を賞翫する人びと〔図12〕とともに、進歩した養豚場が描かれている〔図13〕。この映画では、ロケットやヘリコプターなど、未来の移動装置も特撮で表現されてはいるが、豚については大きめの豚をそのまま撮影したようで、ことさらに巨大なものには見えない。



図12 巨大な果物を前に



図13 未来の養豚場

リー博士の農場

同様の近未来を舞台に、豚の巨大化をテーマとしたSF連環画に、『割掉鼻子的大象』（『鼻を切りおとしたゾウ』1958）がある。中国のSF史に関心があるかたならば、この原作が、1950年代に書かれた同名の児童むけSFであることには、容易に想到するだろう。作者は遲叔昌（1922～97）と于止。本作は、遲叔昌が中国少年儿童出版社の雑誌『中学生』に投稿したものの、はじめは相手にされず、あとになって、社長兼編集長の葉至善（1918～2006）の目に触れ、葉が文章に修正を入れたうえ、共著の形で、1956年4月号の同誌に掲載されたものである。于止は葉至善のペンネーム。同年11月には、単行本も刊行された〔図14〕。雑誌掲載時には「科学幻想故事」と銘打たれている〔注4〕。



図14 『割掉鼻子的大象』

「一九七×年八月二十三日、私は〈大戈壁国营農場〉の豊かな収穫を取材すべく、戈壁灘にある都市にやってきた。この町の名前はまことに特殊である。〈緑色の希望〉というのだ。五年前に出版された地図をひもといても、この名は見つからないだろう」——原作は、このような文言で始まる。1956年当時の読者にとっての、二十年ほど後の近未来における、砂漠に人工的に作られた都市が舞台になっている。ぼくは、同じころに作られた映画『護士日記』（『看護婦日記』1957）が大好きだが、王丹鳳さんが演じる若い看護婦がみずから進んで赴任してゆく土地も、何もない砂漠の中の都市建設現場であった。

連環画では、新興都市があるのは「北大荒」という具体的な地名になっており、都市の名前も〈緑宝石〉となっている。また、物語の時間も「一九七五年八月二十三日」と具体的な時間に特定されている^{〔注5〕}。以下、連環画を観賞していこう〔図15〕。

空港に着いた「私」は、市の中心区にある新城ホテルの旅客送迎車——それは栗色の〈解放牌〉の乗用車であるよし——に乗って、ホテルに移動する。町の建築物にはモスク風のものもあり、異国情緒＝未来感覚を感じさせる〔図16〕。

ホテルに着いた「私」は、外で子供たちが騒ぐ声を耳にする。聞けば、「ゾウを見にいこう!」と言っているのである。だが、この町には動物園はまだ造られていないはず。さっそく飛び出していった「私」が目にしたものは、どこかに向かって行進する、十数頭の真っ白なゾウであった。その上に騎っている人に、「どこから来たの?」とたずねると、「国营農場からですよ」との答えである〔図17〕。

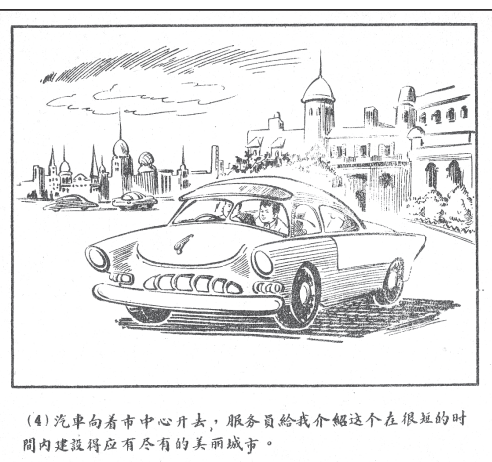
日本の漫画では、心の中で思ったことをあらわすような、泡のような吹き出しが、この作品では、セリフの表現になっている。

その「ゾウ」を見た「私」は、こう考える。——「あれ? なんか変だぞ?」 そう、目の前のゾウたちには、その動物の最大の特徴であるはずの「長い鼻」がなかったのである!

首をかしげながらホテルにもどった「私」を待っていたのは、一通の手紙であった。それは、中学時代の親友の李文建からであった。あの頃は、いつも二人で、い



図15 連環画『割掉鼻子的大象』表紙



(4) 汽車向市中心开去，服务员給我介紹这个在很短的時間內建設得应有的美麗城市。

図16 『割掉鼻子的大象』第4コマ



(15) 观众們七嘴八舌，看法不同，各有高見。一个女孩子大声地問了那騎在大象上的小伙子，才知道他們是国营农場的。

図17 『割掉鼻子的大象』第15コマ

ろいろ奇想天外な想像をして、新しく考案した機械を作っては試していたものだ。ほぼすべてが失敗に終わったが。

中学を卒業すると、「私」は大学の新聞学部で、そして彼は——予想もしなかったことだが——なんと牧畜学部に進んだのだ。彼はいま、この町の国営農場で働いている。ぜひ農場を取材しに来てくれというのである。

「ゾウの鼻を切り取ってしまうだなんて、いかにも彼らしい、突拍子もない発想だな。鼻を切り落とされた、かわいそうなゾウについて、どうしてそんなことをしたのか問い詰めてやろう」〔図 18〕。

翌日、1975 年には流行しているらしい新型車の「北京人」に乗って、国営農場についた「私」は、李文建の迎えを受ける。李君は言う。「きょうは君を、奇跡の部屋に案内しよう」と〔図 19〕。

李文建に案内されるままに、大きな実験棟に入る。そこで目にしたのは、ほかならぬ、あの「鼻のないゾウ」であった。彼の創造した奇跡というのは、この鼻のないゾウのことだったのである。

「これなら、きのう、もう見たよ。鼻を切りおとしたゾウじゃないか」と「私」が言うと、李君は笑いながら、「なに？〈鼻を切りおとしたゾウ〉だって？ こりや傑作だ！ これはね、改良された豚なんだよ。名づけて〈白豚 72 号〉だ」〔図 20〕。

李文建は説明してくれた。——「この巨大な豚は、脳下垂体に刺激を与えて巨大化させたものだ。人間でも、脳下垂体の分泌異常によって、身体発育の balan



図 18 『割掉鼻子的大象』第 24 コマ



図 19 『割掉鼻子的大象』第 26 コマ

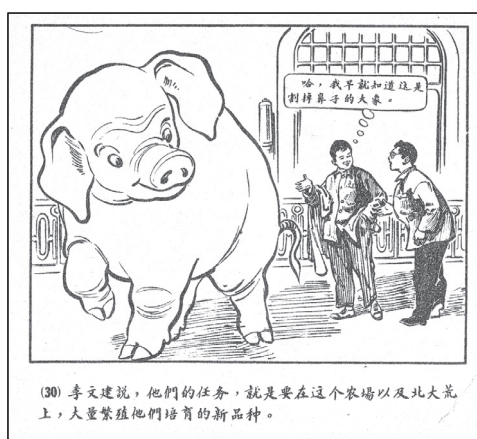


図 20 『割掉鼻子的大象』第 30 コマ

スが崩れ、巨人になることがある。その場合、しばしば知力が劣ることがあるが、豚はただの食料なんだから、知力なんか、どうでもいいってわけさ。うちは農場であって、雑技団じゃないからね」〔図 21〕。

「ただ、大きな問題が生じた。それは、体躯が巨大化すれば、これを支えることができなくなるということだ。体長が5倍になれば、体重はその3乗の125倍になる」。

「私」が「足も5倍の太さにすればいいじゃないか」と言うと、李君は、「それがダメなんだよ。骨の量が多すぎては、食料として無駄が多すぎるんだ」とのこと。そこで、骨と筋肉そのものを増強する「壮骨強筋素」を飼料に加えて飼育した。さらに、足が伸びると折れやすくなるので、成長しなくてもよい部位には、特殊な電波を照射して、成長を抑制したのだという〔図 22〕。

「私」は、李君が語る〈白豚 72 号〉の開発秘話を聞いて、あきれながらも、また感嘆せずにはいられなかった。

李君が、「食事をしていきなよ」というので、二人は農場の食堂に入った。李君がスイッチを入れると、ベルトコンベアが料理を運んできた。小ぶりの西瓜のようなリンゴをはじめ、改良されて巨大になった果物につづいて、最後に出てきたのが、奇跡の 72 号から作られた料理の数々だった。

骨付き 72 号肉の揚げもの、72 号豚足の煮物、72 号の腎臓のスープなどなど……。

李君は言った。「72 号のスモーク・ソーセージの脳下垂体は既に取り去ってあるよ」。——おまえが食べても〈奇跡〉はおこらないから、安心しろ、ということだ。

「私」はさっそく口に入れてみた。その美味しいことと言ったら！〔図 23〕



図 21 『割掉鼻子的大象』第 37 コマ



図 22 『割掉鼻子的大象』第 46 コマ



図 23 『割掉鼻子的大象』第 61 コマ

取材を終えてホテルに帰り、ベッドに入った。その夜、「私」は夢を見た。自分が巨人になった夢だ。翌朝、目を醒ますと、ほんとうに巨人になっていた。困ったことに、着るものがない。ズボンには指二本しか入らない。そこで、ホテルの部屋にあった布団、カーテン、テーブルクロス、ソファのカバー、絨毯などをつなぎあわせ、やっとのことで、パンツが一丁、完成した。「私」はこれを書いて、颯爽と取材に出かけたのだった……。

……ああ、これも夢だった。よかった、よかった〔図 24〕。

ちなみに最後の夢落ちの部分は、原作にはない、連環画ならではの特典画像であろう。文字の編集は遅叔昌と于止になっているので、原著者みずからが承知の上で書き足したものか。

知能を犠牲にして肥えるだけの、食料としての豚を創造せんとする李文建の研究は、西洋世界の S F においては、マッド・サイエンティストの所業とされ、なにやら文学的成就を見そうなテーマではあるが、動物の権利などは、どこ吹く風、当時の中国においては、輝かしい科学の勝利として謳歌されたわけである。——いや、待てよ。もしかしたらこれは、ぶくぶく太って頭の中はカラッポになっていく現代人への警鐘や諷刺なのかもしれない（たぶん、ちがうだろう）。

ゾウ豚は全国に！

1960 年に刊行された児童歌曲集『歌兒哪有猪兒多』（『歌あるところにブタはあふれる』。中国少年儿童出版社/編輯、中国少年儿童出版社、1960 年 6 月）には、児童のために作られた中国各地の養豚テーマの歌が収められている〔図 25〕。その「内容提要」には、「本書には全部で 18 首の新児童歌謡が収められている。それらの内容は、全てが目前の高速度で発展する養豚事業を反映したものなのだ」とある。そのなかに、「路過公社養猪場」と題された、以下のような歌があった。

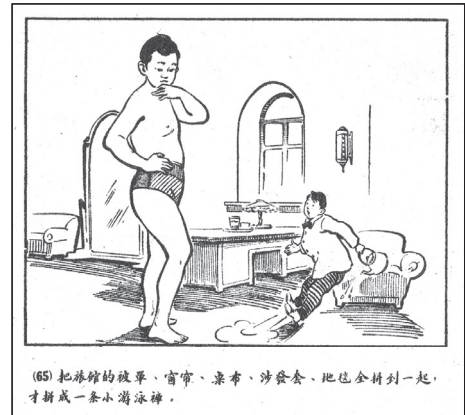


図 24 『割掉鼻子的象』第 65 コマ



図 25 『歌兒哪有猪兒多』表紙

寄り道したよ 公社の養豚場
 孫がお爺さんの 手を引いて
 「お爺さん お爺さん
 大きな白い ゾウがいる！」
 お爺さん 杖つきながら言うことにや
 「あれはわたしの公社で育てた
 大きな大きな 白ブタじゃ
 餌を食って 大きくなって
 肥えて太った 白ブタじゃ
 ゾウのようだが ゾウじゃない
 社員はみんな 呼んでいる
 〈でっぶり肥えた ブタの王様〉」

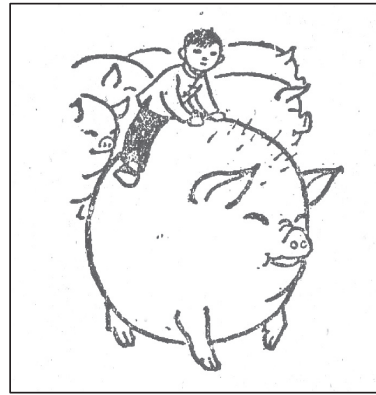


図 26 「路過公社養豚場」

山西省万榮の榮河公社で作られた歌であるという^{〔注6〕}。怪物的な〈でっぶり肥えた
 ブタの王様〉のイラストをご鑑賞あれ〔図 26〕。

豚をめぐる敵との戦い

大躍進の失敗——三年の大災害は、恐るべき飢餓地獄との戦いであつたが、それと
 反比例するかのように、腹いっぱい肉を提供してくれる夢の中の豚は、ぶくぶくと
 肥え太っていった。そして 60 年代前半は、養豚のテーマにも新しい展開が見いだせ
 るようだ。

たとえばここに『小梅追猪』（『梅ちゃん、豚を追う』。張道揚/改写、徐通潮/画、
 少年儿童出版社、1965 年 6 月）という児童画冊がある〔図 27〕。表紙を見るかぎりでは、紅領巾を
 首に巻いた梅ちゃんという女の子が、黒豚を連れているもので、子ども向けの養豚キャンペーンがテー
 マかとも思えるが、じっさいに読んでみると、それ
 だけではないようだ。

病気のお母さんのお見舞いに、病院に向かって歩
 いていた梅ちゃんは、そばを走り抜けた公社のトラ
 ックの荷台から、豚が一匹とびおりたのを目にし
 た。公社の大切な豚をなくしてはいけないと、梅ち
 ちゃんは豚のあとを追った。あちこち探してやっと見
 つけた豚は、生産隊の富農分子、王 刁 刁^{おうちょうちょう}が引いて
 いこうとしていた。

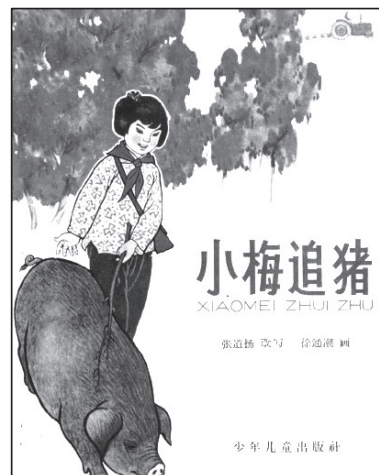


図 27 『小梅追猪』表紙

「それは公社の豚よ。どこに連れていくの？」

「これは、おれが育てたものさ」

「うそよ。ほら、公社のマークが^お捺してある」

「うーん……まあ、かたいこと言うなよ。ほら、おじさんが、お小遣いをあげよう」

「そんな臭い金は要らないわ！」

「じゃあ、いま持っているお金をぜんぶ出すからさ」

そう言いながら、王がポケットから札束を差し出すと、梅ちゃんは、これを叩き落とす。

「このあまっこ！ どつかれたいか！」と、王は^{きせる}煙管を振り上げて、梅ちゃんを^ぶ打とうとする〔図28〕。

王の煙管を見て、梅ちゃんは、以前、この男について聞いたことを思い出した。解放前には、この煙管で、王は、村じゅうの多くの貧乏人^ぶを打ったのだ。お母さんの額にある大きな傷も、こいつがやったのだ。階級敵への恨みは、梅ちゃんに力を与えた。満身の力を込めて、煙管を振り払うと、王の襟首をつかまえて、大声で叫んだ。

「くたばりぞこないの富農め！ あたしと一緒に公社に行くのよ！」

やがて梅ちゃんの声聞きつけてやってきたのが、仕事帰りの社員たちであった。みんなで王を捕まえると、引っ立てていった。めでたし、めでたし！

『猪舎風波』（殷志揚/原著、林頌英/改編、趙静東/絵図、鄧柯/封面設計、天津美術出版社、1964年9月）は、『韓梅梅』が提示していた、下放された知識青年における自己修養の問題を、テーマのひとつにしている〔図29〕。

初級中学を卒業した^{こうぎよく}黄 鉦は、進学せず、県の農場に分配されて、豚の飼育員になる。この仕事に興味を持たない黄は、ミス^{ミス}を繰り返えし、批判を受ける。豚の飼育は、かれの理想の中の「戦う」仕事とは、ほど

遠いものであった。黄は、こんな仕事はもうやめようとする。だが、黄の心中を察していた于書記の懇切丁寧な教育によって、黄は考えを改める。養豚だって立派な「戦



図28 『小梅追猪』表紙



図29 『猪舎風波』表紙

いの場」なのだと。かれは豚を襲う疾病と戦い、これを克服する。さらに、豚たちを惨殺し、養豚事業を破壊しようとする反革命分子との闘争も展開していく。こうして養豚場は、知識青年の自己との戦いであるとともに、養豚事業を妨害しようとする階級敵、反革命分子、破壊分子といった、具体的な敵との戦いの場ともなっていた。

文革時期の養豚もの

やがて文化大革命が発動されると、その初期にあたる 60 年代後半においては、連環画出版活動は停滞し、『連環画報』も休刊となる。70 年代に入ってから革命模範劇の連環画化が始まり、1974 年くらいから、ふたたび連環画の出版が活気を帯びてくる。これとともに、養豚テーマもまた復活する。それらのいくつかを見てみよう。

『猪場風雲』（『養豚場の風雲』李光偉/編、楊興林・朱忠福・劉為民・枚辺/絵、人民美術出版社、1974 年 6 月）も知識青年をテーマとしている〔図 30〕。

唐杰は、下放して「養猪姑娘」となったが、それまで養豚作業を担当していた劉聿清なる男を手伝うよう言われた。養豚場の豚を見ると、どれもこれも痩せ細っている。唐杰は、劉がかつての地主の親戚であり、夜になると公共の飼料を盗んで自宅に運び、自分の豚のために使っていたことを、また、唐杰の豚には毒を盛っていたことをつきとめる。唐杰のたゆまぬ努力と闘争によって、劉は逮捕される。唐杰の豚は、ますます肥え太り、彼女は、養豚事業において、赫々たる貢献を成し遂げる〔図 31〕。

『猪舍風波』と同様、この作品においても、知識青年と敵との戦いが、物語の山場のひとつを構成しているのだが、黄鈺と決定的に異なるのは、唐杰が、養豚に対する生理的嫌悪や、プライドをめぐる葛藤などとはいっさい縁のない完璧な青年であることである。『猪舍風波』では、主人公の成長を描いたあとの階級闘争であったが、『猪場風雲』では、そのような知識青年ものにありがちなテーマは飛び越して、いきなり階級敵の黒い影がちらつくようになっている。



図 30 『猪場風雲』表紙



86 唐杰在成绩面前不停步，在广阔天地里，主动接受贫下中农再教育，决心在养猪事业上做出新贡献。

図 31 『猪場風雲』第 86 コマ

『起根発苗』（『根が張って苗が出る』
 陝西省高陵県文化館/編、趙述友・朱公明・
 史蘿/絵、人民美術出版社、1974 年 11
 月）〔図 32〕の主人公、張宝の唯一の楽
 しみは、チャルメラを吹くことである。
 いつも仕事が終わると、チャルメラを吹
 いて、社会主義を熱愛する心情を歌うの
 だった。

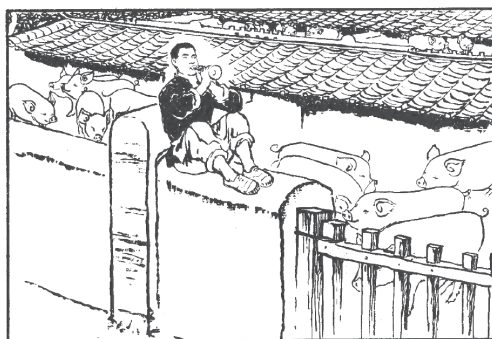
解放前、張宝の両親は地主に殺された
 のであった。毛主席と共産党のお陰で、
 いま張宝は、幸福な日々を送っている。
 養豚を任された張宝は、養豚場に寝泊ま
 りして、熱心に養豚の科学を学んでい
 る。張宝は、豚小屋の塀の上に坐って、
 豚たちに「山丹丹花開紅艷艷」の曲を吹
 いて聴かせる〔図 33〕。「山丹丹花開紅
 艷艷」は、郭蘭英がうたって流行した歌
 曲である。

『小猪倌』（『小さな豚飼い』。定陶県
 革命委員会文化組/供稿、定陶県業余文芸
 創作組/編絵、言師中/封面画、山東人民
 出版社、1975 年 5 月）〔図 34〕では、
 紅小兵の松松は、雷鋒精神にのっとり、生
 産隊の養豚場に出向いては、仕事に参加
 していた。地主分子の〈二猪精〉夫婦は、
 たくみに養豚場に潜入して、生産隊が県
 のために飼育した良種の豚を毒殺しようと
 画策する。これを発見した松松は、かれ
 ら階級敵と激しい闘争を展開し、老書記
 や民兵とともに、〈二猪精〉を逮捕する。

このように、文革期の養豚ものは、肥え
 た豚を作るという本来のテーマは二の次
 に置かれ、これを妨害し破壊する「敵」との命がけの戦いというテーマが、前面に出
 てくる。敵との戦いは 50 年代の作品にも見られるものの、文革期の敵は、同情の余
 地もない極悪非道の犯罪者である。



図 32 『起根発苗』表紙



46 现在，张宝的喇叭比过去吹得更响了。每天傍晚，张宝都坐在猪圈的墙头上，吹奏《山丹丹花开红艳艳》。

図 33 『起根発苗』第 46 コマ



図 34 『小猪倌』

夫婦喧嘩は、豚も喰う

闘争は闘争だが、いかにも文革末期にふさわしい、養豚業にたずさわる老夫婦のあいだの、ほのぼのとした思想闘争を描いたのが、『養猪阿奶』（『養豚ばあちゃん』川沙県龔路公社文芸創作組/写詞、盛亮賢/絵画、上海人民出版社、1976年9月）である〔図35〕。

上海郊外の陸家浜。模範飼育員の老阿奶は、革新を堅持し、大胆に新しい方法を探索し、真剣に毛主席の思想を学んで、これを実践している。いっぽう彼女の夫の陸阿祥は、養豚場の場長の任にあり、あくまでも旧来の方法を遵守しながら養豚を進めようとする頑固者である。養豚老夫婦は、その思想的分岐によって、豚小屋もふたつに分けて、養豚闘争を展開する。新思想の持ち主である阿奶は、科学的な方法で豚を巨大化することに成功し、旧習に固執する夫のような人びとに対して確たる事実を突きつけた〔図36・図37〕。

かくして陸阿祥も最後には敗北を認めると、阿奶は言う。

「あたしたち、お互いに学習し、いっしょに前に進みましょう！」

この作品には、小令と阿芳という二人の「養猪姑娘」が登場するが、ともに阿奶の味方で、陸阿祥の考えを批判する。

このあたりにも、「革新＝女性」と「旧套＝男性」という、先進性のイメージを

女性に賦与しようという意図がかいま見えているだろう。そしてまた、この連環画においても、大きく肥え太った豚はゾウに例えられ、阿奶も「養猪姑娘」たちも、そして陸阿祥もまた、「豚を大きく育てて、ゾウのようにする」ことを、さながらスローガンでもあるかのように、その口から発しているのだ〔注7〕。



図35 『養猪阿奶』表紙



図36 『養猪阿奶』第38コマ



図37 『養猪阿奶』第58コマ

〈鼻を切りおとしたゾウ〉の系譜

いま、ゾウの図像的特徴から「大きな耳」と「長い鼻」を抽出するならば、前者に対しては、『漢書』『五行志』に、「豕は大きな耳であるが、^{みみざと}聡察くはなく、聴の氣が^{そこな}毀われている。故に豕禍がおこる」とあり^{〔注8〕}、現代の観察者であるウィルヘルム・ワグナーの『中国農書』にも、華北の豚の耳を描写して、「それは屢々甚だ長くて、その尖端が鼻の前部に届き、眼を全く遮蔽してしまっている」とある^{〔注9〕}。中国の盗賊たちの隠語では、豚のことを「大耳頭」と呼ぶこともあるらしい^{〔注10〕}。また、『西遊記』の猪八戒は、しばしば「長嘴大耳」と形容され、飛行の際に必要なとあらば、その大きな耳をさらに広げて帆となし、これに風を孕むことでスピードアップをはかるのである。大きな耳は、豚にとっても特徴のひとつとされていたことがわかる。「長嘴」のほうは、ゾウの鼻に当たる部位であろう。現実の豚は、これを用いて土を掘り返し、トリュフを採取するが、八戒は、これで穴を掘り、寝床も作れば、墓も掘る。腐敗した柿の実が積もった山では、巨大化した八戒は、その鼻で道を切り開いていく。

清末、光緒 17 年 (1891) 5 月中旬発行の『飛影閣画報』に掲載された「母猪脱殻」という記事では、ある農家の黒豚が、その黒い毛皮をスルリと脱いで白豚に変じたという事件を報じていて、呉友如がこれをヴィジュアル化している〔図 38〕。文字テク



図 38 呉友如「母猪脱殻」(1891)

ストでは、腹がしだいに膨らんできて、「白いゾウのようになった」（與白象相似）とあり、ただ鼻のところだけは黒いままであったという。絵師が、変身した豚を、ことさらゾウに似せて描こうとしていることは明らかであろう〔注11〕。

中国のSF小説の歴史を振りかえるならば、清朝もぎりぎりの頃に書かれた高陽氏不才子の『電世界』（1909）は、近未来において完成された電気ユートピアを描いたものだが、その第九回では、養豚科学の成果として、やはり巨大な豚が紹介され、「金華の白毛ブタは、インドゾウと見まごうばかり」と描写されている〔図39〕〔注12〕。

近未来のゴビ灘の国営農場で改造された巨大豚72号が、それを目撃した「私」から「鼻を切りおとしたゾウ」と形容されたのも、養豚ばあちゃんたちが、「ゾウのように大きくしましょう！」と声をあげていたのも、そのような言い回しは、かならずしも「新鮮事物」というわけではなかったようである。

「豚を大きくすればゾウになる」という発想を丹念に遡行してゆくならば、中国人の、動物をめぐるイマジネーションの淵源にたどりつくのかもしれない〔注13〕。

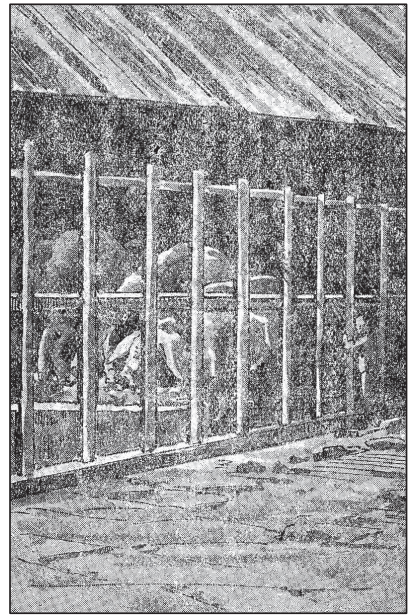


図39 高陽氏不才子『電世界』（1909）

仕女図としての「養猪姑娘」

効率の良い豚肉の生産は、いま現在でも畜産業の研究項目だが、国家を挙げての「肥えよ太れよ」の熱きスローガンは、過去のものとなった。韓梅梅は、もはや遠い時代のヒロインだが、知識青年が、希望する道に進むことがかなわず、煩悶する姿というのは、永遠に消えることのないテーマである。ただし現代においては、もはや養豚場は、そのテーマを語るのに適切な舞台ではないのかもしれない。養豚が賤業であるとの認識も、いまや時代遅れであろうし、亥年を迎えるたびに街に氾濫し、おおいに幅を利かせているのは、発財や富貴を連想させる豚の吉祥イメージ群である。

そして「養猪姑娘」という画題は、いまでも健在ではあるが、むしろ、都市の人間に農村の牧歌的な空気を想起させるものでもあり、別の一面から言えば、仕女図（美人画、ピンナップ・ガール）のモチーフのひとつとして、落ち着いてしまったようにも思える〔図40～42〕。



図 40 趙華勝「養猪姑娘」(1980)



図 41 陳応華「養猪姑娘」(1982)



図 42 何鏡涵「養猪姑娘」(1980)

注釈

1. 「戦え、養猪姑娘〈韓梅梅〉！」(『連環画研究』第9号、2020年3月)。
2. 『浩然著作及研究資料 第二輯』(実用書局、刊行年不明)は、1957年11月刊行の『萌芽』第21期(17～19頁)に掲載された浩然「母猪作客」の復印を載せているが、連環画『失踪的猪』には「根拠浩然原作同名小説改編」とある。
3. 武田雅哉『中国乙類図像漫遊記』(大修館書店、2009)「世界の中心で愛を叫んだくだもの——SF巨大生物の国」参照。
4. 武田雅哉・林久之『中国科学幻想文学館 下』(執筆担当:林久之。大修館書店、2001)24頁。

5. 舞台を未来に設定することの多いSF小説においては、実際の年代が設定時代を超えてしまった場合——そして、その未来予想図が、かなりハズれてしまった場合——作品を書き変えるべきか否かという問題は、しばしば作者を悩ませていることだろう。その時点で作者が存命であれば、読者の違和感を解消するために、時代設定等を変更したりすることがある。たとえば、アーサー・C・クラークは、『幼年期の終わり』の冒頭の設定を、20世紀後半から21世紀に書き変えた。

「割掉鼻子的大象」の設定は、『中学生』掲載時（1956）は「一九七×年」だが、これを収録した、翌年出版の『児童文学選 一九五六』（1957年6月）では「一九七五年」となっている。連環画（1958）は、これを踏襲して「一九七五年」としたものか。なお、邦訳に『鼻のないゾウ』（「中国の児童文学」第1集2。遲叔昌ほか/作、伊藤敬一/訳、阿部肇・松本零士/絵。太平出版社、1972）があるが、これは『児童文学選 一九五六』に拠っているという。いくつかの版本から、時代設定の変遷を表にまとめておこう。

掲載書籍	刊行時	出版社	著者・編者	設定
『中学生』（雑誌）	1956	中国少年儿童出版社	遲叔昌・于止	197×
『割掉鼻子的大象』	1956.11	中国少年儿童出版社	于止・遲叔昌	1975
『児童文学選 一九五六』	1957.6	人民文学出版社		1975
『割掉鼻子的大象』（連環画）	1958.2	天津美術出版社	遲叔昌・于止	1975
『大鯨牧場』	1963.5	中国少年儿童出版社	遲叔昌	19×
『科学文芸作品選・上』	1980.7	人民文学出版社	高士其・鄭文光	19×
『中国科学幻想小説選』	1982.8	遼寧人民出版社	葉永烈	19×
『中国科幻小説大全・上集』	1982.12	海洋出版社	饒忠華	1985
『科幻故事集 割掉鼻子的大象』	1999.4	湖北少年儿童出版社	楊鵬	19×
『古峽迷霧』 (中国科幻小説世紀回眸叢書2)	1999.10	福建少年儿童出版社	葉永烈	1985

6. 「路過公社養猪場」「路過公社養猪場，孫子拉着爺爺嚷：“爺爺爺爺你快看，那裏有箇大白象。”爺爺手裏拄拐杖，臉帶笑容忙開腔：“那是咱社的大白猪，喂的高大肥又胖，說它是象不是象，社員稱他‘肥猪王’。”（山西万榮）——榮河公社 紫明綱」（『歌兒哪有猪兒多』4頁）。
7. 第5コマ「要把猪兒養得象西郊公園裏的“大象”」、第13コマ「你們能養得肥猪象“大象”」、第32コマ「阿奶養的猪已經象“大象”」、第56コマ「老太婆養的大猪真象“象”」。

8. 『漢書』「五行志・中之下」「豕大耳而不聰察，聽氣毀，故有豕禍」。
9. ウィルヘルム・ワグナー『中国農書（下巻）』（天野元之助/関、高山洋吉/訳。東亜研究叢書第八巻。生活社、1942）556 頁。
10. 吳漢痴主編『切口大詞典』（原名は『全国各界切口大詞典』上海東陸図書公司、1924。上海文芸出版社影印本、1989）「盜賊類」11 頁。
11. 『飛影閣画報』（光緒 17 年（1891）5 月中旬号）掲載。いま『吳友如画宝』（上海古籍書店、1983）「山海志奇図」第七集上冊・25b による。
12. 高陽氏不才子『電世界』（『小説時報』第 1 期、1909）。武田雅哉『中国飛翔文学誌——空を飛びたかった綺態な人たちにまつわる十五の夜嘶』（人文書院、2017）440～446 頁参照。
13. 武田雅哉『猪八戒の大冒険——もの言うブタの怪物誌』（三省堂、1995）第四章「八戒絵姿考」参照。



「農業学大寨報頭選」 『連環画報』1976 年第 2 号